

令和 元年 5 月 11 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26463331

研究課題名（和文）心不全患者の療養生活支援のためのセルフモニタリング評価尺度実用化プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a program for practical application of Evaluation Scale for Self-Monitoring by Patients with Heart Failure:ESSMHF

研究代表者

服部 容子（Hattori, Yoko）

甲南女子大学・看護リハビリテーション学部・准教授

研究者番号：20337116

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,800,000円

研究成果の概要（和文）： 先行研究で開発した心不全患者のセルフモニタリングの概念と評価尺度を療養生活支援の諸場面において活用できるようにすることで、患者自身による健康管理状況をとらえ、日常生活上の課題を見出すことが可能となり、心不全による再入院予防につながることは可能と考えられた。そこで、先行研究を基盤に、心不全患者のセルフモニタリングの概念と評価尺度をより簡便に理解し、利用できることを目指してセルフモニタリングに関する情報のweb化および簡易版評価尺度の開発検討を行った。

その結果、尺度簡易版の質問項目を再編するとともに患者や医療者がセルフモニタリングの知識や関連する情報を獲得が可能なホームページを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

心不全は完治が難しく、その病状悪化を予防するために日常の活動量、水分摂取、体重など様々な自らの状況を把握し管理していくことが必要となる。本研究は、入退院を繰り返す心不全患者が、自らの健康状態と日常生活を自分らしく維持するために必要となるセルフモニタリングに着眼し、その様相を測定できる心不全患者のセルフモニタリング評価尺度を開発してきた実績をもとに、その簡易版の検討とwebでのセルフモニタリングに関する情報提供を行ってきた。それにより、心不全患者および患者の悪化防止にかかわる医療者が適切なセルフモニタリングに関する知識を獲得し、その様相を客観的に把握する指標を提供することができるようになった。

研究成果の概要（英文）： Re-hospitalization due to worsening of heart failure tends to increase, but it is possible to stabilize condition and prevent re-hospitalization by appropriate health management in daily life. To grasp the health management situation by the patients and find out problems in daily life it will become possible. Therefore, in this research, based on the previous research, we aimed to make it easier to understand and use the concept and evaluation scale of self-monitoring of heart failure patient and developed of website. As a result, we reorganized the simplified version of the question item and confirmed its validity. In addition, we worked on the improvement of content by creating a website where heart failure patients and medical personnel related to heart failure patients can acquire information on self-monitoring of heart failure and information on daily life support.

研究分野：看護

キーワード：看護 心不全 セルフモニタリング 尺度開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

心不全患者数は年々増加傾向にあった。また、心不全の増悪を防止するために患者は自らの健康管理能力を高め、再入院を予防する必要があった。

在宅療養生活を送る心不全患者の治療、管理において重要な要素の一つは、患者が体調の変化や心不全症状の出現を自ら管理し、病状の増悪リスクを軽減できるようにすることである。それに対して看護師は、心不全患者が自身による健康管理を適切に行えるよう知識提供し、患者が自らの病状や運動耐容能に応じた生活を送ることができるように支援している。患者の多くはそれを受けて心不全症状の出現に注意を払ったり、体重や血圧などの身体所見の変化を把握するなど、自らの健康管理を日々の生活で実践している。しかしながら、不十分な健康管理や病状増悪の兆候に対する気づきの遅れなどにより、再入院に至るケースは少なくない。そのため患者自身による健康管理能力を向上し、心事故を防止できるようにすることは急務の課題となっていた。

2. 研究の目的

心不全患者の病状増悪は日常生活の健康管理不足により起こりがちであり、それは再入院を繰り返す要因となっているが、そのような心不全患者の増加に歯止めをかけ、患者の生活の質を向上することを目指すことを目的に据えた。具体的には、入退院を繰り返す心不全患者の健康管理能力を高めるために、一般的な留意事項に関する知識提供に加えて看護師が患者個々の自己管理方法や病状増悪の傾向を把握し、個別的な療養生活支援を実践できるようにすることである。そのような個別的な支援を開始するには、まず、患者が自らの病状増悪に伴う兆候や身体感覚、日常生活活動の変化を定期的に観察する「セルフモニタリング」の様相を把握する必要がある。

しかし、その有用可能な測定方法は未開発であったため、先行研究にて心不全患者のセルフモニタリングの概念と評価尺度(心不全患者の療養生活支援のためのセルフモニタリング評価尺度(Evaluation Scale for Self-Monitoring by Patients with Heart Failure:ESSMHF))の開発を行った。今回、その既存となった概念と尺度をもとに、療養生活支援の諸場面において実際に利用可能性の高い尺度への改編とそれを実際に実用化して活用できるよう情報提供することを目指していく必要があると考えられた。

そこで、本研究では、先行研究を基盤に、心不全患者のセルフモニタリングをより簡便に用いられる評価尺度の検討を行うことを第1の研究目的とした。その次に、患者およびかかわる医療者がセルフモニタリングの概念やモニタリングの方法について情報収集しやすい環境を作ること、そしてその情報発信を通じて患者がかかりつけの医療者とセルフモニタリングを意識したコミュニケーションを図り、より適切な健康指導を受けたり自己管理能力を向上することにつなげられることを促すプログラムとして構成していくことを第2の研究目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、すでに基盤となる尺度が開発されているが、その尺度は2領域10因子、37項目からなるものであり患者負担が大きく、分析も手間のかかる状態であった。2領域、すなわち、患者の「身体症状の変化」「身体活動の変化」「体調管理の状況」を『自覚』したり『測定』したりするという観察に関わる領域と、それらを『解釈』し自らの状況の判断に関わるもう一つの領域は、一連のプロセスの異なるフェーズであるが、質問内容としては水分摂取のことであったり、浮腫の確認のことであったりと、重複する要素が含まれているため、それらをスリムアップし、質は落とさず項目数を減らすことが可能であると考えられた。また、質問項目の測定を集計する際、逆転項目が複数含まれているため単純な加算方式では集計できず、とらえ違いの無いように留意することが求められ、体調が万全ではない患者、多忙な看護師にとっては負担となっていることが考えられた。それらを踏まえて尺度を再構築するため、質問項目の再編とその構成概念妥当性の分析、および活用可能性を検証することとした。またセルフモニタリングに関する情報を提供する環境としてウェブサイトを設置し、情報提供を促し活用プログラムを構成していくこととした。

4. 研究成果

簡易版の作成は、重複していたり言い回しの難しい尺度項目を削減したり統合したりして、その分野に秀でた研究者および心不全患者を対象に構成概念妥当性の分析を行った。また、尺度の測定結果はすべて単純な加算方式で見出せるように工夫を凝らした。

その結果、領域に関係なく全項目合わせて14項目のコアとなる質問項目で構成された尺度の簡易版を抽出することに至った。またウェブサイトは構築し公開済みで、セルフモニタリングの意義、有用性、測定内容、セルフモニタリングの実際の方法に関する情報を提供できるように構築した。その結果に至るプロセスの詳細を以下に示す。

2014、2015年度は、先行研究で開発した心不全患者の療養生活支援のためのセルフモニタリング評価尺度(Evaluation Scale for Self-Monitoring by Patients with Heart Failure:ESSMHF)を心不全患者の健康管理の適切さや困難状況を的確に把握できるツールとして実用化することを目指して、質問項目の見直しと評価方法の再検討を行った。ESSMHFの対象となる方に、質問項目のわかりやすさ、回答しやすさ、回答中の印象、問題点の状況等を確認する調査を実施した。その結果、質問項目がわからないという事はないものの、質問数が多く負担感があること、回答の際に迷う項目があることがあきらかになった。

その一方で、調査項目を見て、どのような健康管理が必要なのかがわかったり、自分自身が

できていない部分を感じることができてくるなどと、自己を振り返る質問項目で構成されており、質問項目の内容は妥当であることも明らかになった。引き続き、尺度の構成概念妥当性の検証を行いながら、質問項目の調整を行い、より回答しやすい、活用しやすい尺度の作成を目指す必要があると考えられた。

また、幅広い対象者が尺度を活用し、健康管理に関する知識を得られる媒体として、ESSMHFをセルフチェックとして実施できるホームページを開設し、アクセスしやすい環境整備に取り組んだ。当該年度は、セルフモニタリングに関する説明で構成するシンプルなホームページを作成するとどまっておき、以降は、ホームページに健康管理および心不全兆候の早期発見と早期対応に関する情報を掲載したり、セルフチェックの結果、各自がどのような健康管理状況にあるのか、またどのような改善が必要なのかを示唆できるホームページに拡大していくことを目指し、心不全患者支援の基盤作りに励む必要があると考えられた。

2016～2018年度は、心不全患者の療養生活支援のためのセルフモニタリング評価尺度の質問項目の見直しと評価方法の再検討を行った結果、質問項目のわかりやすさ、解答しやすさ、回答中の印象、回答の際に迷う項目があることが明らかとなったことを踏まえ、その再編に努めた。患者自身が自己の健康管理状況を振り返る質問項目で構成されており、質問項目の内容は妥当であることも明らかになっていたため、その結果を踏まえて、質問項目の統廃合を行い、質問項目数を減らしながら、簡易版として14項目を抽出した。その14項目について、心不全患者の看護実践の専門家に確認を依頼してその構成概念妥当性を検証した。また、心不全患者に質問項目のわかりやすさ、回答しやすさの再検証を行い、その内容妥当性の確認を実施し、問題ないことを確認するに至った。以上の検証結果から、心不全患者の療養生活支援のためのセルフモニタリング評価尺度(Evaluation Scale for Self-Monitoring by Patients with Heart Failure:ESSMHF)の簡易版は実用可能性の高い質問項目で構成されていること、そして、患者のセルフモニタリングを把握するうえでコアとなる質問項目に焦点化されているため簡便であり、負担を軽減することに至ると考えられ、その有効性は高いものと考えられた。

また、もう一つの課題である患者およびかかわる医療者への心不全患者のセルフモニタリングに関する情報提供は、ウェブサイトの構築と充実により促進した。まず、ウェブサイトの内容充実を図るために解説内容を豊かにし、心不全患者のセルフモニタリングの概念と評価尺度(心不全患者の療養生活支援のためのセルフモニタリング評価尺度(Evaluation Scale for Self-Monitoring by Patients with Heart Failure:ESSMHF)の質問項目を取り上げて、その各項目を測定する意義、また観察のポイントなどを具体的に解説し、セルフモニタリングの測定意欲につながるよう閲覧者の興味をひくコンテンツ化を図った。心不全においていかにセルフモニタリングが重要であるかは、あまり語られておらず、その周知徹底から必要な状況であったため、多くの人の認知向上を目指し、セルフモニタリングの必要性、その概要、意義について情報を発信した。次に、心不全を適切に管理するためのプログラムとして、セルフモニタリングを実践する方法やセルフモニタリングすべき内容1つ1つを取り上げ、それを確認する意義と方法について解説した。それにより、患者個々が自らの状況に気づきをもち、適切な健康管理状況に至っているのかどうか、もしくは自らの課題は何かを考える機会となることを期待した。さらに、その結果を踏まえ、かかりつけの医療者と自らのセルフモニタリングの状況の適切さ、課題等について確認および更なる健康教育を受ける機会を求めることにつながることを促し、評価尺度実用化プログラムとした。その活用の実態把握および効果検証には課題が残されているが、未着手の分野において分析的データ検証に基づく情報を発信したことは有益なことであり、評価に値するものと考えられた。

今後の課題としては、心不全患者の療養生活支援のためのセルフモニタリング評価尺度(Evaluation Scale for Self-Monitoring by Patients with Heart Failure:ESSMHF)の簡易版が構築されたことを踏まえて、実際の心不全患者を対象とした信頼性と妥当性の更なる検証を進め、利用効果の高い尺度であることの確認を続けることがあげられる。また、その尺度を適切に活用する方法について情報提供をしながら、患者および医療者がその活用意義を共有し、ともに利用できるようにしていくことも課題である。

また、患者と医療者が心不全に関して、より確かな知識を持ち、適切なセルフモニタリングを実践することを通して、当初の目的であった患者の自己管理能力の向上と再入院の防止を成し遂げるため、情報発信量およびその内容をより豊かにし、多くの人の関心をひきつけられるようにしていくことも課題である。そのためにはウェブサイトのコンテンツの充実を図るとともに、今回のプロジェクトではできなかった心不全患者のセルフモニタリングに関するブックレットの作成も必要であると考えられる。

さらに、セルフモニタリングを必要とする療養生活者が病気に対する不安、心配なことを解決しながら、健康管理能力を高める知識を得られるようにするとともに、その知識を用いてかかりつけの医療者と共同的に実践することに至るプログラムの道筋をさらに明確化していくことも今後期待されることである。

2025年問題に向けて、高齢者増加が加速する中、在宅療養生活を促進すること、また病気をもちながらも高いQOLを維持できる手立てを一つでも構築していくことは我が国の今後に不可欠な事柄である。特に心疾患が増加傾向にある現状において、心不全という病状を管理する能力を備えることは広く知られるべきことであるといえる。ウェブサイトへのアクセス件数は右肩上がりであり、尺度利用に関する問い合わせ、および尺度を研究に利用したい旨の申し出数

も増加傾向にある。本プロジェクトは終了となるが、残された課題と向き合いながら、更なる検証やプログラムの開発とその効果測定、情報発信内容の刷新を継続していく予定である。

5. 主な発表論文等

Self-monitoring for heart patients, Science Impact, 2019 (印刷中)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://xn--hdks855tg6c7sx.com/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2) 研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。